

「終戦80年」

は
ら
か
ら

「年」の、これまた重い節目です
なぜ、「重い」か言うまでも
ありませんが、その結果が中国
を中心とする多くのアジア諸国
や太平洋諸島の人々に大きな被
害を与え、また、日本の国民に
も多大な犠牲を強いることになつ
たからです。

した浄土真宗を始め日本の仏教界も負わねばなりません。例えば、日中戦争が始まつた時、判明しているだけで五〇機以上の軍用機を仏教団体が軍部に献納しています。東本願寺は山門に大「皇威宣揚」「生死超脱」「挺身殉国」と三メートル四方に大

目ではないと思う方もあると思
いますが、いえいえどんでもあ
りません。来年は、日本が米英
に宣戦布告した一九四一年から
数えて「八五年」の重い節目で
す。日本による大陸侵略の発端
となつた満州事変が起つたの
一九三一年から数えると「九五

今年は、終戦あるいは戦後「八〇年」の節目という」とでさまざまな行事や活動が行われました。来年は「八一年」。節

ません。なぜなら、加害者とし

電 話 ○七七一五二二一七六四六
住職携帶 ○九〇一七八八七一六四七
○九〇一七八八七一六四七



除夜の鐘 夜九時から十時半まで

西本願寺は、ご門主の名前で次のように文書を發布しました。

きます。ここ最近は、近隣の方を含めて百名以上の参拝です。どなたでもおつき頂けますので、お誘い併せてご参拝下さい。丸屋町側、駐車場側どちらからでもお越しいただけます。

新年参拝の案内

お正月は隨時参拝と致してお
ります。ご家族皆様で隨時本堂
にお参り下さい。

元旦 午後一時、四時
二日 午前九時、王子

南無の会 勝利..本堂

十二月一月はお休みをさせていた
ござります。

・親鸞聖人の生涯

⑩二月八日（日）十四時～十六時
⑪三四一四（日）十四時～十六時

春の彼岸会 (OHIGAWAのハドー)

三月二十二日（日）の予定です。
時間・内容も含めた正式案内は
年明けにお送りします。

《その他の行事》

◇成道会

十一月九日（火）一時～

場所..ピアザ淡海ホール（無料）

講師..真宗大谷派僧侶

KBS京都「心が笑顔になるラジオ」
（土：朝8時）のDJ

川村妙慶氏

『生きがいの持てる人生

（～どん底から見える仏の智慧～）

◇全戦没者追悼法要

大津組研修会

二月七日（土）十五時～十六時半

場所..浄宗寺（御幸町）
講師..願海寺（御幸町）住職
浄土宗平和協会理事長

廣瀬卓爾氏

◇真宗のつどい

二月二十二日（日）受付十二時

主催..真宗教団連合

場所..能登川コミニティホール
講師..田代俊孝氏（仁愛大学長）
講題..「悲しみからの仏教入門

（～いのちを考える～）

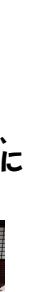
◎右の諸行事に参加ご希望の方は
お寺までご連絡下さい。

フォトでほっと

仏事のABC ①

私たちの宗派名・本山は

報恩講に向けてみんなで準備

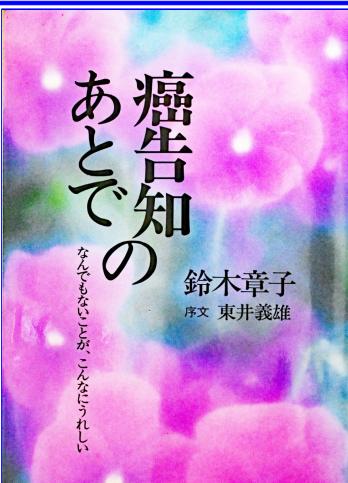


お内陣のお飾りを下ろして一年一回のお磨き。ピカピカになりました。

BOOK & DVD紹介

今号から「仏事のABC」と題して、基本の「き」から、浄土真宗の仏事についてお話ししいこうと思います。皆様からの疑問・質問も大歓迎ですので、よろしくお願ひします。

まずは私たちの「宗派の名前」からいきましょう。これはまさに基本中の「き」ですので、確かめるつもりでお読み下さい。



癌告知のあとで
鈴木章子
序文 東井義雄

なんでもないことがこんなにうれしい
なんでもない
なんでもない
なんでもない
なんでもない
こんなにうれしい
(検査の日)

これが宗派名です。本山は
龍谷山 本願寺（西本願寺）
（りゅうこくざん ほんがんじ（にしほんがんじ））

これが宗派名です。本山は

親しみを込めて**お西さん**とも

呼ばれます。「お西」と呼ばれ

る理由は、京都の堀川通に本願

寺派の本山があり、ここから

みると東側の烏丸通に

真宗大谷派（お東）の本山が

あるからです。けつ

こう単純な理由です。

因みに、浄土真宗には、本願

寺派以外に、（）内は本山名・所在地

真宗大谷派（貞空本廟・東本願寺・京都市）

真宗佛光寺派（佛光寺・津市）

真宗木辺派（錦織寺・野洲市）

真宗興正寺派（興正寺・京都市）

他にも福井県内に本山がある

四派があり、計十派が真宗教団連合という組織を作っています。

これら以外にも「浄土真宗」と自称する宗派や「親鸞」の名

前を付けた教団がありますが、

中には、カルト的な宗派もあります。名前を伏せて「歎異抄講

座」など伝道活動をしていることもありますのでご注意下さい。



本願寺派の紋章「下り藤」

親鸞聖人の生涯 ②

2

比叡山の親鸞（続き）

前回は、親鸞の誕生から得度までのお話でした。九歳の時、青蓮院で得度を受ける時、夜更けだったので日を改めようという僧に、

明日ありとと思う心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものは、という歌を詠み、その夜のうちに得度を済ませられたとのこと。

わざか九歳でこのような歌を詠まれたというのはやや過ぎた話と思われるかもしれません。私も以前はそう思いました。しかし、前回でご紹介したように親鸞の生家である日野家が漢文学や中国史の専門家である文部博士を輩出していること、官選和歌集の編集に関わった日野資業が親鸞の曾祖父であること、あるいは、後の著作（漢文、和讃など）の完成度の高さから推し量つても、幼少期から相当の歌の素養を身につけておられたことは推測できます。

学生は皇族・貴族・武士の出身

また、母親を八歳で亡くしたことは、親鸞を感受性の高い人間にしたとも思われます。現代的な感覚で想像するのは控えた方がよいかもしれません。

(2) 比叡山での修行

そのような親鸞でしたが、得度した後、しばらくして正式に受戒して比叡山延暦寺に登り、僧としての道を歩み始めました。比叡山では、どこに住まわれたのでしょうか。ひ孫の覺如が書いた伝記である『御伝鈔』によると横川首楞嚴院で天台の教義を学ばれたとあります。

横川は三塔（東塔、西塔、横川）の中で、最も奥まつていて俗化を免れていた場所ともいわれています。また、日本浄土教の祖と仰がれる源信の住んでいた恵心院がありました。ここで聖人が修行を積まれたことは、後の聖人の思想形成に影響を与えたことは間違いません。

比叡山の僧は学生と堂衆あるいは大衆に分かれていました。



西塔にある常行堂（本尊＝阿弥陀如来）左と法華堂（本尊＝普賢菩薩）「にない堂」とも呼ばれる。親鸞の頃には横川にも常行堂があった。

であり、堂衆は農民や下人など低い身分の者でした。堂衆は修行することはできず、学生の世話をしたり、僧兵として武器をもつて寺領や山を守る役を担っていました。

(3) 延暦寺の変遷と世俗化

前々号の復習を兼ねて、最澄以降の延暦寺の変遷をみておきましょう。その方が親鸞の山で暮らすら念佛し（「不斷念佛」）、学問に励み、時折は洛中で勤まる法要に出仕するという生活だったようです。こういう修行・生活を二十年間勤めたのでした。不断念佛の「仏」は、阿弥陀仏をさします。この修行は末法

最澄は、朝廷から「天台宗」の開宗を正式に承認され、天台宗独自に僧侶を養成できる「大乗戒」も認められ、興福寺や東大寺という奈良仏教に対して新たな教団をつくつたのでした。

その後、円仁や円珍の活躍によって、延暦寺はますます隆盛を極め、了源の時代には焼失した諸堂が再建されたのでした。

しかし、円仁と円珍の系譜を引く両派の対立が表面化し始めました。円珍派は比叡山を降り、三井寺園城寺により（寺門派）、比叡山に残った円仁派は山門派

思想とともに広がりましたが、特段重要な修行というわけではありませんでした。従って、それを修める僧侶の地位もそれほど高くはなかつたようです。

を形成し対立していました。

また、京の都に近いこともあり、貴族の子弟が出家して比叡山の僧になることが多くなり、そうなると、俗世間での出自によつて、僧の出世や地位が決まるようになり、比叡山の世俗化が益々進んでいきました。

親鸞が出家したのは、そのような時代でした。さほど高い身分ではなかつたことで、却つて世俗的な競争に巻き込まれなかつたと言えるかもしれません。比叡山の中心である東塔西塔から外れた横川に住んだのも、親鸞が自ら求めたとされていますが、ひよつとすると、そこに住まざるを得なかつたのかもしれません。もしそうなら、親鸞という人物は、自分が置かれた逆境を順境に変換するたくましさを持っていたのかもしれませんね。順境に変換とは、浄土教との出会いといふことです。

(4) 二つの「限界」

右のような延暦寺内の抗争や出世競争を尻目に、聖人は厳し

く戒律を守り、常行堂で常行三昧の修行に没頭されました。

阿弥陀仏の淨土への往生するた

めに「一心」に修行を積まれたのでした。しかし、どれほど修行を積んでも、煩惱の心を沈めて「一心」になり切れない自分が明らかになるばかりでした。

その頃の聖人の心境を、存覚(覚如の長男)が『嘆徳文』という書物の中で、次のように語っています。

定水を凝らすといへども識浪しきりに動き、心月を観ずといへども妄雲なほ覆ふ。

《意訳(住職)》

心を、凧いだ湖面のように静めようとしても、様々な思いで心が波立つ。澄み切った満月を

思い浮かべようとしても、様々妄念が心を雲のように覆う。

(5) 六角堂へ

六角堂は、京都の烏丸三条より一すじ南側の通りを東に入つたところにあります。

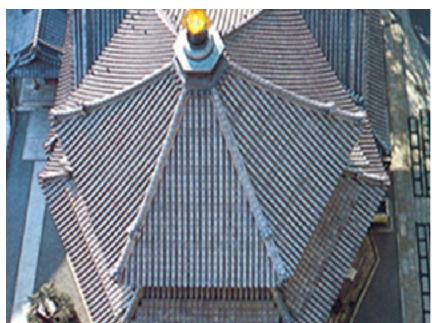
お堂の形が六角形であることからそう呼ばれます。正式には頂法寺といい、当時は、比叡山延暦寺の末寺でした。ですから、聖人は、山にいる時から六角堂のことはご存じだったはずです。聖人が尊敬される聖徳太子の創建によることが参籠の理由とも言われています。

「参籠」とは「お籠もり」とも呼ばれ、堂内にこもつて礼拝と読誦に専念することです。それを通して、仏様から何らかの指示(夢告など)を頂くことを期待したのです。聖人もきっと同じお気持ちだつたでしょう。

比叡山に留まつて「自力修行」の道を続けるか、比叡山を降りて、専修念佛の道を尋ねるか。あるいは、私の資質能力の限界か、自力聖道門の限界か、この問題に葛藤されたのでした。

親鸞はその答えを求めて、六角堂に参籠することを決意された

のでした。二九歳の時でした。



頂法寺（六角堂）

示されたのでした(夢告)。そうして九五日目の明け方、夢の中では救世觀音菩薩から、これから歩むべき道を示唆する文を示されたのでした(夢告)。

それはどのような内容だったのでしょうか。それは次号のお楽しみに。